

「ビーバースカウト」の制度と活動

—幼稚園における教育課程との比較を含めて—

圓 入 智 仁

Beaver Scout System and Activities

—Including Comparisons with Kindergarten Curriculum—

Tomohito Ennyu

1. はじめに

本稿は、子どもを対象とする社会教育団体であるボーイスカウトの中でも、小学1年生と2年生の男女を主な対象としている「ビーバースカウト」の制度について、幼稚園の制度や保育の5領域との比較を含めて検討し、さらに、その試行段階における具体的なプログラムを示すことで、その特徴を把握するものである¹⁾。

ビーバースカウトの活動の根拠となる「課目」は、小学校以上学校教育のような教科型の構成ではなく、いわばプロジェクト型のカリキュラム構成を前提としている。大人の指導者が活動を計画し実践するに当たっては、5つの「課目」と、それを細分化した「細目」の、どの項目にそれぞれの活動を位置づけることができるのか、常に意識している。このような教育課程の考え方は、幼稚園における教育活動と、教育要領における5領域との関係と共通している。更に両者には、環境構成や遊びを重視するなどの共通点もある。ここに、対象となる子どもの年齢こそ異なるものの、類似点の多い、社会教育としてのビーバースカウトの活動と、学校教育としての幼稚園教育を比較、検討することの積極的な意義がある。単体としてみるだけでは得られない知見を、比較によって得ることができる。

これまで、本稿が比較を試みる幼稚園教育要領は、幼稚園における教育実践として、あるいは保育所保育指針と関連づけて議論されることがほとんどであった。その他の教育課程と関連づけるという視点がなかったものであり、本稿のように社会教育との関連づけはこれまで管見の限り、例がない。本稿はその試行的なものになる。

2. 両者の制度の比較

最初に、ビーバースカウトの概略を説明する。ビーバースカウトでは、標準的には上述の対象年齢の子どもおよ

そ10名から20名程度を1つのグループである「隊」として組織している。ここには、指導者としての「隊長」が1名と、それを支える「副長」が2名、それぞれ配置されている²⁾。両者には、指導者養成のための研修を受講すること求められている。さらに、「補助者」数名が関わることもある。これらの指導者がおよそ月に3回、プログラムを計画し、実施している。毎回の実施時間は1時間から2時間程度である。

一方、幼稚園設置基準や幼稚園教育要領によると、幼稚園の学級あたりの幼児数は原則として35人以下である。学級には教員免許を持つ教諭などが配置され、毎学年の教育課程に係る教育週数は39週を下回ってはならず、1日の教育課程に係る教育時間は4時間を標準としている。

ビーバースカウトの活動の基本的な理念として「訓育」がある。それはボーイスカウト日本連盟の「教育規定」第7章第12条において、以下のように定められている³⁾。

ビーバースカウトの訓育は、スカウトが隊の活動への参加や家庭での生活指導によって、自然に親しみ、基本的な生活技能、社会性、表現力等を伸ばし、カブスカウトへの上進を目指すものとする。

この訓育に基づいて設定されているビーバースカウトの活動の目標は、以下の通りである（「教育規程」第7章第13条⁴⁾）。

- 神(仏)と身の回りの人たちについて認識させる。
- 自然に親しませる。
- 表現力を伸ばす。
- 所属する喜びを味わわせる。
- 考える力を育てる。
- 健康と安全について知らせる。

- 活発に活動させる。
- 体験をととして学ばせる。
- 愛と感謝の心を育てる。
- 国際組織の一員であることを知る。

これらを具体的に活動に取り入れる際の指標となるのが、ビーバースカウトの活動における「課目」である。この「課目」には「生活」、「健康」、「自然」、「社会」、「表現」の5つがあるが、これは次項で触れたい。

さらに、ビーバースカウトの活動の実施については、以下の通り示されている（「教育規定」第7章第14条⁵⁾）。

ビーバースカウト隊の活動は、スカウトの興味と保護者の要望を取り入れた活動の目標に沿って、スカウト自らの体験を通して行われる。

- ② 活動は、隊集会を中心に、スカウトがみんなと仲良く遊ぶことによって行われる。
- ③ 隊の運営に当たっては、年間計画会議、プログラム会議、隊指導者集会、隊集会、保護者会等を実施する。
- ④ 隊指導者は、保護者の協力を得て、スカウト活動を支援し、1人ひとりのスカウトの成長を図る。

このように、ビーバースカウトの活動においては、子どもたちの興味だけでなく、保護者の要望を取り入れ、保護者の協力を得ることが求められている。また、体験や遊びを重視している点、上の部門であるカブスカウトへの「上進」を意識している点も確認しておきたい。

次に、ビーバースカウトの活動のねらいとして、以下の3つが示されている⁶⁾。

みんなとともになかよく遊ぶ
自然に親しむ
楽しみや喜びをわかちあう

これらについて、ボーイスカウト日本連盟が発行する『ビーバースカウト隊長ハンドブック』には、以下のような説明がある。第1に、子どもは遊びを通して他者との関わりや社会的なルールを学ぶのであり、ゲームやスポーツ、遊びを通して自主性と協調性を学ばせ、基本的な生活技能を身につけさせることを目指している。第2に、子どものときから自然に親しみ、自然の驚異や営みについて学ぶ事が必要とした上で、自然とのふれあいを大切にし、自然の美しさやもろさ、ものを大切にする優しい心や、たくましく生きていく心構えを育てている。第3に、集団生活の中で積極性（やる気）、協調性（思いやり）を養うプログラムを通して、仲間とのつきあい

方や社会生活の過ごし方に対して、自然に正しい態度が身につくようになり、さらに自分に対する自信と仲間に対する思いやりに繋がる。

一方、学校教育法では幼稚園の目的について、「幼稚園は、義務教育及びその後の教育の基礎を培うものとして、幼児を保育し、幼児の健やかな成長のために適当な環境を与えて、その心身の発達を助長することを目的とする。」（第22条）とある。この目的を実現するため、幼稚園における教育は、以下の目標を達成するよう行われるものとなっている（第23条）。

- 一 健康、安全で幸福な生活のために必要な基本的な習慣を養い、身体諸機能の調和的発達を図ること。
- 二 集団生活を通じて、喜んでこれに参加する態度を養うとともに家族や身近な人への信頼感を深め、自主、自律及び協同の精神並びに規範意識の芽生えを養うこと。
- 三 身近な社会生活、生命及び自然に対する興味を養い、それらに対する正しい理解と態度及び思考力の芽生えを養うこと。
- 四 日常の会話や、絵本、童話等に親しむことを通じて、言葉の使い方を正しく導くとともに、相手の話を理解しようとする態度を養うこと。
- 五 音楽、身体による表現、造形等に親しむことを通じて、豊かな感性と表現力の芽生えを養うこと。

これら5つの目標は「健康」、「人間関係」、「環境」、「言葉」、「表現」という5領域に対応していることは指摘するまでもない。

「幼稚園教育要領」の「第1章総則」では、「第1 幼稚園教育の基本」が示されている。ここで幼稚園における教育は、「生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なもの」であり、「環境を通して行うものであることを基本とする」とされている。さらに、「幼児の主体的な活動を促し、幼児期にふさわしい生活が展開されるようにすること」、「遊びを通しての指導を中心と」すること、そして「幼児一人一人の特性に応じ、発達の課題に即した指導を行うようにすること」という言及がある。

このように、ビーバースカウトも幼稚園も、次の段階における教育を見据えて、子どもたちの「基本的な生活技能、社会性、表現力等」あるいは「心身の発達」を、「伸ばす」あるいは「助長する」ことを目的としている。そして、この目的を達成するために、各々5つの「課目」や「領域」が設定されている。さらには、子どもの興味や主体性を重視すること、遊びを中心として活動を展開することも共通している。

3. 両者の「課目」と「領域」の比較

ビーバースカウトの「課目」には「生活」、「健康」、「自然」、「社会」、「表現」の5つがあることは既に指摘した。これらそれぞれに、7から9の細目が設定されている（表3-1）。

細目を履修するごとに1枚のシール「木の葉章」が授与され、子どもたちはそれを『ビーバーノート』という小冊子に貼ることができる。この「木の葉章」は「課目」ごとに色が違っている。さらに、10枚の「木の葉章」を獲得するごとに、子どもたちは「小枝章」という小さなアップリケを受け取ることができる⁷⁾。この「小枝章」は、ビーバースカウトの制帽の左側に縫い付けることになっている。これらのシールとアップリケは、ボーイスカウトの他の部門で採用している「バッチシステム」、すなわち、修得した知識や技術をデザインしたアップリケ（バッチ）を制服に縫い付けることで、それぞれのメンバーが持つ知識や技術を、視覚的にわかるようにする仕組みの応用である。

これらの細目について、『ビーバースカウト隊長ハンドブック』には、次のような解説がある⁸⁾。すなわち、「ビーバースカウト部門では、隊指導者が予め設定した木の葉章の細目を、隊の活動や家庭での活動を通じて履修」すること、「活動の始めや終わりに、よくわかるように説明すること」、「細目の展開に当たっては、課目・細目の趣旨をよく理解して、隊活動の中で自由に、具体

的にしていくこと」、「隊の創意と工夫をいかす」こと、「細目の内容は『体験する』ことに重点を置いている」こと、「自然の変化をはじめとして、いろいろなことに『関心を持つ』こと」、「1つの細目について、観点や展開をかえて履修すれば、その都度木の葉章を与えること」、子どもの「個人差もあるので、すべての課目・細目の完修にこだわる必要は」ないが、「特定の課目に片寄らないことに配慮すること」である。これらを述べた上で、「課目・細目についての体験・修得の認定は、隊長が行い、その際、「家庭での体験や修得を主眼とする細目にあつては、保護者からその実績を聞いて」隊長が認定すること、以上である。このように、「木の葉章」の細目は、いろんな解釈や運用が可能になるように設定されており、それを各隊の指導者が工夫して具体的な活動を設定することになっている。

さて、ビーバースカウトが履修する上述の5つの「課目」は、幼稚園教育要領の5領域を想起させる。そもそも、1956年に『幼稚園教育要領』が成った際、当時の文部省は教育内容を「健康」、「社会」、「自然」、「言語」、「音楽リズム」、「絵画制作」の6領域に分類したことは、周知の通りである⁹⁾。その後、1989年に実施された『幼稚園教育要領』の改訂において、上記6領域が「健康」、「人間関係」、「環境」、「言葉」、「表現」の5領域となった。ビーバースカウトが成立した1986年当時は、幼稚園教育要領が6領域の時代であり、上記の5つの「課目」が教育要領の影響を受けている可能性もあるが、その証拠を

表3-1 ビーバースカウトの「木の葉章」細目

生活	健康	自然	社会	表現
1 神様や仏様にお参りを する	1 早く寝て早く起きる。	1 花や野菜などを育て る。	1 近くの工場や博物館な どを見学する。	1 歌を歌う。
2 あいさつをする。	2 食物の好き嫌いをなく すようにする。	2 自然の生き物や天気な どを気をつけて見る。	2 近所のお祭りなどに参 加する。	2 好きな楽器を演奏す る。
3 隊・組・うちで仕事を 進んでする。	3 運動をする。(鉄棒、 縄とび、かけっこ、水 泳、力だめしなど)	3 自然の材料で遊び道具 を作って遊ぶ。	3 みんなのために働く人 たちのことがわかる。	3 簡単な劇をする。
4 幼い者や弱い者には親 切にする。	4 ルールを守ってゲーム をする。	4 季節の移り変わりや特 徴を気をつけて見る。	4 みんなのためになるこ とをする。	4 絵をかいたり絵を見た りする。
5 欲しい物があっても少 しの間我慢できる。	5 昔からの遊びを教わっ てする。	5 ピクニックや探検に出 かける。	5 ボーイスカウト仲間の 集まりに参加する。	5 簡単なダンスや踊りを する。
6 はいといいえがはっき り言える。	6 近所の体育行事などに 参加する。	6 月や星などの様子を気 をつけて見る。	6 交通のきまりを守る。	6 みんなの前でお話をす る。
7 家の決まりを守る。	7 手、足、体などの清潔 に気をつける。	7 簡単な料理をする。	7 よその国の話を聞く。	7 材料や道具を工夫して 工作をする。
8 身の回りをいつもきち んと片付けておく。				8 本を読んだり感想を話 したりする。
				9 手紙や日記を書く。

見出すことはできなかった。

そもそも、スポーツ少年団など他の社会教育活動が小学校入学時から活動の対象としていることを意識して、小学3年生から5年生の子どもを対象とする「カブスカウト」よりも下の年齢の子どもを受け入れることをボーイスカウト日本連盟が検討し始めたのが、1979年であった。実際に、連盟内で子どもたちの活動プログラムを検討していた「進歩委員会」が出した報告書『カブ年齢未満のプログラムについて 進歩委員会中間報告』（発行日時不明、頁数なし）によると、この時点で既に、全国でいくつかのカブスカウトが、小学1、2年生をその活動に受け入れていたという事実を確認していた。これら、実際に小学1、2年生を受け入れている組織の紹介の中で、活動には以下のような設定があることに触れている。

社会—地域社会での活動を通じたもの
家庭—家庭中心とした活動を通じたもの
運動—健康を保ち、体力を増進する活動を通じたもの
工作—芸術につながる活動を通じたもの
歌—情操を養い仲間での活動を通じたもの

これらを解説する記事がないため、詳細は不明である。ただ、現行の5つの「課目」である「生活」、「健康」、「自然」、「社会」、「表現」という言葉を見る限り、上述の「社会」、「家庭」、「運動」、「工作」、「歌」のいくつかは継承されていると考えられる。それはおそらく、1986年に小学1、2年生を対象とするビーバースカウトが発足する前の準備段階、すなわち、1982年1月から2年間の「実験」段階¹⁰⁾（全国で17個隊、各隊が発足した時点の総数で子ども273名、指導者112名¹¹⁾）と、1985年1月から翌1986年5月までの「試行」段階¹²⁾（1985年6月13日の時点で、全国で142個隊¹³⁾）における、具体的な実践を通してのことであると考えられる。

一方、幼稚園教育要領における5領域には、3つの「ねらい」と8から13の「内容」が示されている。ここで、ビーバースカウトにおける5つの「課目」と、幼稚園教育要領における5領域における、「細目」（ビーバースカウト）と「内容」（幼稚園教育要領）について、共通して用いられている「健康」を例に取って比較したい。

ビーバースカウトにおける「健康」の「細目」は以下の通りである。

- 1 早く寝て早く起きる。
- 2 食物の好き嫌いをなくすようにする。
- 3 運動をする。（鉄棒、縄とび、かけっこ、水泳、力だめしなど）

- 4 ルールを守ってゲームをする。
- 5 昔からの遊びを教わってする。
- 6 近所の体育行事などに参加する。
- 7 手、足、体などの清潔に気をつける。

一方、幼稚園教育要領における「健康」の「内容」は以下の通りである。

- （1）先生や友達と触れ合い、安定感をもって行動する。
- （2）いろいろな遊びの中で十分に体を動かす。
- （3）進んで戸外で遊ぶ。
- （4）様々な活動に親しみ、楽しんで取り組む。
- （5）先生や友達と食べることを楽しむ。
- （6）健康な生活のリズムを身につける。
- （7）身の回りを清潔にし、衣服の着脱、食事、排泄などの生活に必要な活動を自分でする。
- （8）幼稚園における生活の仕方を知り、自分たちで生活の場を整えながら見通しをもって行動する。
- （9）自分の健康に関心を持ち、病気の予防などに必要な活動を進んで行う。
- （10）危険な場所、危険な遊び方、災害時などの行動の仕方が分かり、安全に気をつけて行動する。

同じ「健康」ではあるが、具体的な項目の表現には違いがある。「清潔」や食事、運動、遊びといった表現が共通しているものの、他方に含まれていないものもあることが確認できる。

さて、ビーバースカウトでは「木の葉章」が用意されていることは上述の通りであるが、幼稚園にはそれに該当するような制度上の仕組みはない。日々の保育が幼稚園教育要領のどこに位置付けられるのか、教職員だけでなく子どもや保護者にも可視化することも、検討に値するだろう。

4. ビーバースカウトの活動例

さて、具体的にはどのようなプログラムを用意しているのだろうか。その例を、『ビーバースカウト隊長ハンドブック』に掲載されている年間プログラムの例で見ることにしよう（表4-1）。

4月に新入隊員（1年生）が入隊して「ビーバー」となり、2年目には「ビックビーバー」へと「進級」する。5月の「ゴミ0の日」とは、5月30日、全国一斉に清掃を行うキャンペーンである。同様に、9月の「カントリー大作戦」とは、「スカウトの日」として設定されている9月の第3月曜日の前後に、全国で空き缶などを拾う地

表 4-1 年間プログラムの例

月	タイトル	タイトルのねらい	活動の概要	行事 (団・学校・地域等)	木の葉章
4	入隊おめでとう、ビーバー 仮装パーティ	所属する喜びを味わわせる 創造性を養い表現力を伸ばす	進級式、入隊式をする。 仮装パーティをして遊ぶ。	入隊式・進級式	社会 表現
5	ビーバーの体力測定 街をきれいにゴミ拾い	健康と安全について認識させる 体験を通して公共心を養う	体力測定をする。 ゴミ0の日、奉仕をする。	ゴミ0の日	健康 社会
6	ブーメランを飛ばそう 電車でのってどこ行こう	飛ぶことにより想像する喜びや化学の不思議を知る 公共交通機関の仕組みを知り、マナーを学ぶ	牛乳パックや空き箱でブーメランを作って飛ばす。 電車に乗って隣町まで出かける。		表現 生活
7	工作にちょうせん 駅前探検	作る喜びを味わう 地域社会について知る	身近なものでできる簡単な工作作り。 駅前のお店や公共交通機関を見てまわる。		表現 社会
8	七夕祭り 生き物さがし	日本の習慣について知り、夜空の観察もする 自然に親しませ、生き物の大切さについて学ぶ	七夕遊びをしながら星をながめる。 川遊びをしながら生き物を観察したり、スケッチを する。環境について考える。		生活、表現 自然
9	あきカンひろい 忍者にへんしーん	奉仕する喜びを知る 自然の中で活発に活動する	カントリー大作戦に参加する。缶拾いをする。 忍者になり術を体験することで忍者について理解する。	スカウトの日	生活 健康、表現
10	公園であそぼう 野外料理	自然に親しみ活発に活動する 体験を通じて食物の恵みに感謝する	野原でおにごっこや段ボールの坂すべりなどの遊び をする。 野外料理（カートンドッグ）を作って食べる。		自然 健康
11	落ち葉でおえかき ビーバーの募金大作戦	秋の自然を感じさせる 愛と感謝の心を育てる	落ち葉を使っていろいろな絵を書く（貼り絵をする）。 ユニセフについて知り、ユニセフ募金をする。		表現 社会
12	老人ホーム訪問 うたっておどろう	身のまわりの人達について認識させる 表現力を伸ばす	老人ホームを訪問し、お年寄りに接し楽しく過ごす。 みんなで楽しく歌を歌い、スタンツをする。		社会 表現
1	ビーバーのクリスマス お正月遊び	クリスマススの意義を知る 伝承遊びの種類を知る	クリスマス会をする。 カルタ、福笑い、すごろくなど正月遊びをする。	クリスマス お正月	社会、表現 健康
2	たこ作り ホットケーキづくり	作る喜びを知る 家でできる料理を体験する	たこ作り、たこあげをする。 おやつ作り（ホットケーキ）をする。		表現 健康
	B-P 祭にいこう お話の会	ベーデン・パウエルについて知る 深く考える力を養い愛と感謝の心を育てる	団（地区）行事のB-P 祭へ参加する。 昔話や民話などを聞く。	B-P 祭	社会 生活
3	ハイキング 大ゲーム大会	自然の移り変わりを五感を通して知る ゲームを通してルールを守ることを知る	春をさがしてハイキングに行く。 ゲーム大会をする。		自然 健康

公益財団法人ボーイスカウト日本連盟「ビーバースカウト隊長ハンドブック」（2015年、48-49頁）より、一部改変。

域清掃活動のことである。10月の「カートンドック」とは、コッペパンに野菜やハムなどの具材を挟み、アルミホイルや牛乳パックで蒸し焼きにする簡単な野外料理のことである。そして、2月の「B-P祭」とは、ボーイスカウトの創始者であるイギリス人バーデン・パウエル

の生誕を祝う行事のことである。

この年間プログラムを見ると、各月の季節を意識しつつ、5つの課目をまんべんなく配置していることがわかる。ビーバースカウトの活動は木の葉章のどの細目に位置づけるのか、隊の指導者はいつも意識しているのであり、それぞれの活動を通して「木の葉章」の細目の履修が明確になっている。また、子どもたちとしても、シールを集めるという行為に惹かれて、意欲的に活動に参加することができるだろう。

5. ビーバースカウトの実験段階におけるプログラム

1982年に始まる実験段階の活動プログラムは、日本連盟が作成して各隊に提供することで、統一プログラムとして機能していた¹⁴⁾。各月の活動は「3週の集会で構成し、第1週をテーマへの導入、第2週・第3週でテーマの展開という形をとり、ゲーム、歌を入れる。また、各月のプログラムの中には“おうちでのしごと”をいれる」ことにした¹⁵⁾。実験期間が始まると、日本連盟は各月の数ヶ月前になって、各隊に月間プログラム案を提示していた¹⁶⁾。その月間プログラムをまとめて年間行事としてのものが、表5-1「1982年度年間プログラム表」である。これは1982年度が終わる頃になって、ようやくそろった当該年度の月間プログラムを一覧にしたものである¹⁷⁾。ここで、こいのぼりやかたつむり、たなばた、花火、台風など、季節に合わせた活動を想定していることがわかる。

また、各隊に示された月間プログラムはB4の1枚に印刷されたもので、イラストと共に、プログラム内容が掲載されていた。例えば4月の活動計画では、テーマ、ねらい、第1週から第3週までの活動内容、歌としてあげられている「めだかの学校」の歌詞と、「おつかいありさん」の歌詞付き楽譜、ゲーム「横とびじゃんけん」と「ふうふう競争」の解説文が印刷されていた。なお、この4月号が実質的な実験の始まり月ということもあり、4月の計画には「日程のめやす」として週に1回の活動時間割について、次のように示されていた。

5分 始まりのセレモニー
5～10分 ゲーム
10～20分 お話とゲーム

10～15分 ビーバーにえさをやる（おやつ）
20～30分 工作・運動など
5～10分 うた
5～10分 れんらく
終わりのセレモニー
計 60～100分

セレモニーとは、集会の開始や終了時に行う儀式であり、指導者を中心に子どもたちが輪になって集まり、掛け声の掛け合いや、当日のプログラムの紹介、連絡伝達などを行う場である¹⁸⁾。およそ、10分前後のゲームや歌、お話と、工作や運動など中心となる活動に20～30分を割り当てていることがわかる。

以下では、ビーバースカウトの実験段階の初期である1982年の4月から6月までのプログラムを概観したい。

（1）1982年4月のプログラム

1982年4月は、この年から始まったビーバースカウトの実験を行う隊に対して、日本連盟が初めてプログラムを提示した月である（表5-2）。各週に行う活動、また家庭で取り組むことについても触れている。表中に見られる「ビーバーのやくそく」とは、実験期間において日本連盟が設定した「ビーバーは なかよくします ビレッジのきまりを まもります」というものである。「ビレッジ」とは、5名程度の「ダム」が4～6集まって組織される活動の単位であり、およそ20～30名規模の組織である。本稿において「隊」として表現している単位と同一である¹⁹⁾。

4月は学年の始まりであり、ビーバースカウトとしてのスタートの月でもあるので、1回1回の集会の内容に統一性がないが、続く5月や6月は、月でテーマを設定して、そのことに1か月をかけて取り組む内容になっている。

（2）1982年5月と6月のプログラム

5月は5日の端午の節句を中心にプログラムが編まれている（表5-3）。ビーバースカウトの実験が行われていた当時、活動には男児だけが参加していたので、「男の子」が強調されている²⁰⁾。端午の節句、鯉のぼり、かぶと作りなどがプログラムの中心である。1つのテーマに沿って、数回に分けて活動を進めていることがわかる。これらの内容は、幼稚園でも取り組むことができるものであり、実際に取り組んでいる園も少なくないだろう。

また6月は、かたつむりをテーマにした活動が設定されている（表5-4）。かたつむりに関心を持たせ、採集し、飼育すること、そしてかたつむりに関連する遊び

表5-1 1982年度年間プログラム表

月	テーマ	プログラムの目標	活動の概要	ゲーム・歌	場所、戸外か集会場か、特に用意する用具
4	ぼくたちは ビーバー	○所属感を伸ばす ○楽しみを通して学ばせる ○伸（仏）と身のまわりの人たちに て認識を育てる	○ビーバーの入隊式 ○ビーバーのミニピクニック ○缶ぽっくりであそぼう	ゲーム○横とびジャンケン 歌 ○めだかの学校 ○おつかいありさん	室内及び周辺 色紙・針金、のり、セロテープ カード用紙・空かん、工作用ひも
5	こいのぼり	○楽しみを通して学ばせる ○グループ活動に参加させる ○健康と安全に留意して、エネルギーを 発散させる	○たんごの節句のお話をきく。かぶとを折る ○こいのぼりをつくる ○こいのぼりをあげる、紙芝居を楽しむ	ゲーム○しんぶん紙ちぎり 歌 ○こいのぼり ○おきなきりの木の下で	○こいのぼり（紙・針金・マジック・ セロテープ） ○かぶと（古新聞）
6	かたつむり	○自然について認識を育てる ○深く考える力を養う（想像力を養う） ○健康と安全に留意して、エネルギーを 発散させる	○かたつむりとあそぶ、おうちで飼育する ○かたつむりのゲーム・歌 ○かたつむりの絵をかく	ゲーム○手の甲たたき 歌 ○かたつむり ○かっこう	野外（観察・採集） 室内（工作・表現・ゲームなど）
7	たなばたさま	○自然について認識を育てる ○楽しみを通して学ばせる	○七夕の話を聞き、星座を知る ○七夕飾りを作る。願いごとを書く ○ロケットを作る	ゲーム○どんけんつ 歌 ○たなばたさま ○ピクニック	野外（色紙・竹） 室内（ダンボール他）
8	ビーバー村 の花火大会	○愛と喜びを外にあらわすようにする ○楽しみを通して学ばせる ※安全について考える ※家族間の親睦をはかる	○親と共に花火大会をする ○花火のお話と絵をかく （※夏休みなので2回程とする）	ゲーム○うしろむきはたとび 歌 ○うみ ○シャボン玉	野外 花火数種類
9	たいふう	○自然について認識を育てる ※安全について考える ※災害時の心がけを知る	○風と雨、カミナリなどのお話 ○台風のとき自分でしておくこと ○台風のとき外で注意しなければならぬこと	ゲーム○おしの手 歌 ○とんぼのめがね ○タわけこやけ	野外（テルテルぼうずづくりなど）
10	ダムづくり	○深く考える力を養う（想像力を養う） ○所属感を伸ばす ○グループ活動に参加させる（仲間と協 力しあう）	○ビーバーについてお話を聞く ○ビーバーの巣づくりを考える ○ビーバー村をつくる	ゲーム○だっこちゃん 歌 ○かくれんぼ ○きくの花	室内・野外（工作・ダンボール等でダ ムの巣づくりをする）
11	秋のとりいれ	○自然について認識を育てる ○楽しみを通して学ばせる	○秋のくだもの、野菜などを知り、農家の仕事 を知る ○ドングリ（くり）ひろいをする。木の実を遣っ た工作 ○いも掘り	ゲーム○おやこがめ 歌 ○たき火 ○小ぎつね	いも掘りなどの場所の確保
12	としのくれ	○いつも幸せでいるようにする ○愛と喜びを外にあらわすようにする	○としのぐれの仕事について話を聞く ○プレゼント作り ○クリスマスツリーの飾り作り ○クリスマスバスバティー	ゲーム○おっとせいの陣とり 歌 ○サンタのおじさん ○あわてんぼうのうた	室内（工作）
1	カルタ大会	○いつも幸せでいるようにする ○健康と安全に留意して、エネルギーを 発散させる	○お正月の話 ○カルタ作り ○カルタとり	ゲーム○はないちもんめ 歌 ○ひのまる ○春がきた	室内（工作）画用紙・マジックなど） 戸外ゲーム
2	じどうしゃ レース	○楽しみを通して学ばせる ○深く考える力を養う（想像力を養う）	○じどうしゃの種類をあげさせる（お話） ○空き箱をつかって自動車を作る ○交通安全と自動車レース	ゲーム○私はまぬけ 歌 ○やぎさんゆうびん ○ふるいもくば	室内（空き箱・カッター・マジック） レース用板など
3	動物のせかい	○所属感を伸ばす（仲間と協力し合う） ○自然について認識を育てる	○小動物のお話を聞く ○すきな動物の絵をかく ○絵や切り絵で動物園をつくる	ゲーム○つながり鬼ごっこ 歌 ○森のくまさん ○山のおんがくか	室内（画用紙・クレヨン等） ダンボール

「カブ年齢未満プログラム 昭和57年度年間プログラム表」（財団法人ボーイスカウト日本連盟カブ年齢未満プログラム特別委員会「カブ年齢未満プログラム実験に関する中間報告」1983年1月、別添2-2）より、一部改変。

表 5 - 2 1982年 4 月 ぼくたちはビーバー

- ねらい
- ・仲間意識の高揚
 - ・楽しみを通して学ばせる
 - ・神仏に感謝の気持ちを育てる

第 1 週	1. ビーバーの入隊式 ・呼名又は自己紹介 ・ビーバーのやくそく, ビレッジのきまりをとる ・ビーバー章をつける ・指導者の紹介と歓迎の言葉
	2. なかよしゲーム大会 ・ビーバーのよく知っているゲームをみんなで楽しむ
	3. 歓迎パーティー ・ゲームやうたなどを交え楽しく
第 2 週	1. ビーバーのミニピクニック ・近くのお寺や神社に散歩に行こう ・おまいりをする 花などつんで供える ・自然かんさつや採集 安全指導 ・戸外ゲーム ・おやつ
第 3 週	1. 缶ぽっくりであそぼう ・空缶に釘で穴をあけ, ひもをとおして, はいてみる ・競争をしよう
おうちでは (毎週反省)	・元気のよいあいさつ
	・早ね早おき
	・春のタネまき
	・春の花の名をたくさんおぼえる

財団法人ボーイスカウト日本連盟『カブ年齢未満プログラム 月間プログラムの展開例』より, 一部改変。

表 5 - 3 1982年 5 月 こいのぼり

- ねらい
- ・グループ活動に参加させる
 - ・健康と安全に留意して, エネルギーを発散させる
 - ・楽しみを通して学ばせる

第 1 週	1. たんごの節句のお話をきく ・男の子であることを印象づける
	2. 元気よくうたをうたう ・こいのぼり 4 月のうたなど
	3. かぶとを折る ・しんぶん紙, つつみ紙などで折る ・ビーバーのマークをつけよう ・弟や妹の分も折ってやろう ・かぶとをかぶって記念写真
第 2 週	1. 大きいこいのぼりを作ろう〈共同製作〉 ・和紙などで 1 ~ 2 m 程度の形を作っておく (指導者で) ・えのぐで彩色したり, 色紙, つつみ紙をうろこ型に切りビーバーが胴体に貼って出来上がり
	2. 小っちゃいこいのぼりも作ろう〈個人ごと〉 ・画用紙をハサミで切ってクレヨンで彩色する ・しの竹に糸で結びつけておよがせる
	3. おやつとゲーム
第 3 週	1. 共同製作のこいのぼりを掲揚する
	2. 布製のこいのぼりの中をくぐってあそぶ
	3. 紙芝居を楽しむ ・物語についての話し合い
	4. おやつ ゲーム うた
おうちでは (事例を発表させほめてやる)	・祝日に日の丸の旗をかかげる
	・たべもののすききらいをいわない
	・弟妹のめんどうをよくみる

財団法人ボーイスカウト日本連盟『カブ年齢未満プログラム 月間プログラムの展開例』より, 一部改変。

表 5 - 4 1982年 6 月 かたつむり

- ねらい ・自然についての認識を育てる
 ・想像力を養う
 ・健康安全に留意してエネルギーを発散させる

第 1 週	1. かたつむりとあそぶ ・あらかじめ採集しておいたかたつむりを観察する ・さわってみる 動きを模倣する ・えさをあたえる
	2. かたつむりをさがしに行く！！ ・住んでいる場所を調べておく ・ビニル袋持参
	3. おうちで飼育する ・飼育方法の注意 ふたに穴のあいた広口びん キャベツやかつおぶし粉 びんの中の湿気をたやさない
第 2 週	1. かたつむりのうたをうたう ・創作ゆうぎなど
	2. かたつむりに箱を引かせよう ※マッチ箱に糸をつける
	3. かたつむりにペットネームをつけよう
	4. 競争させよう 〈力くらべ 速さくらべ〉
	5. 応えん旗 ゆうしょうカップ 金メダルも作る ※ボール紙のカップや金メダル
第 3 週	1. かたつむりの絵をかく ・たくさんかこう 草や花 かたつむりの家もかいてみよう
	2. みんなでかたつむりになる ・ゲーム かたつむり競争 エッサ エッサ！！
	3. かたつむりをうちへかえしてやる ・採集したところにかえす 元気でね バイバイ
おうちでは (事例発表)	・かたつむりを飼う 弟や妹にもあそばせる
	・外で元気にあそぶ
	・おてつだいをきめてがんばる

財団法人ボーイスカウト日本連盟『カブ年齢未満プログラム 月間プログラムの展開例』より、一部改変。

を展開し、最後に自然に戻すという流れである。

以上の通り、ビーバースカウトの活動においては、季節に合わせた内容を工夫し、しかも小学1年生や2年生を想定した活動を展開している。もちろん、幼稚園における教育活動でも、季節感と子どもたちの発達を踏まえた教育を展開している。

このことは逆に、ビーバースカウトも幼稚園も、教える内容が細かく決まっていない以上、子どもたちに関わる大人の発想、アイデアがその教育活動の成否に大きな影響を持つことになる。いかに幅広く情報を収集するか、子どもたちのニーズに応えるのか、あるいは、ビーバースカウトであれば保護者のニーズに応えるのかが問われていると言えよう。これが、教科型ではないプロジェクト型のカリキュラム構成の特徴である。

おわりに

繰り返しになるが、ビーバースカウトと幼稚園とでは、対象年齢、活動頻度、活動時間などが異なっている。教育活動の充実と同時に普及を目指す社会教育に位置付けられるビーバースカウトと、教育活動の充実を主に目指す学校教育法に基づく公教育としての幼稚園教育の違いもある。

保護者との関係に注目してみると、ビーバースカウトでは、その活動に保護者の要望を取り入れることが求められている。その一方で幼稚園教育要領では、保護者の幼児教育に対する理解を求めたり、保護者からの幼児期の教育に関する相談に応じたり、情報を共有したり、幼児と保護者との登園を受け入れたり、保護者同士の交流の機会を提供したり、あるいは、教育課程に係る教育時間の終了後等に希望する者を対象に行う教育活動を実施したりすることなどが求められている。教育活動に対す

る保護者の関与に違いがあることが分かる。

両者には5つの「課目」と「領域」、それらをさらに細分化した「細目」と「内容」が設定されており、遊びを中心とする活動を展開する点で類似している。子どもたちの「基本的な生活技能、社会性、表現力等」あるいは「心身の発達」を、「伸ばす」あるいは「助長する」ことを目的としている。季節を重視していることも共通している。さらに、ビーバースカウトでは「訓育」において「カブスカウトへの上進を目指す」とし、幼稚園も学校教育法において「義務教育及びその後の教育の基礎を培う」こととされている。両者共に、それぞれに続く教育を念頭に置いていることが共通している。

本稿ではビーバースカウトの制度について、幼稚園教育要領に基づく教育活動を展開する幼稚園と比較しながら検討し、次いで、ビーバースカウトの活動について具体例を示した。これらにより、ビーバースカウトと幼稚園教育を、より客観的にみることができ、その相違点や類似点を確認できた。また、幼稚園教育の実践にも、子どもたちが学んだことの可視化というアイデアや、プログラムの具体的な内容に関する示唆を提供できた。このように、学校教育と社会教育の制度や活動に関する比較をすることのメリットは、例えば公教育と塾や予備校の教育の制度や活動の比較など、相互を客観的に見る1つの方法として有効であると考えている。

注

- 1) ビーバースカウトは、1986年に正式に発足した。発足当初は、他のボーイスカウトの部門と同じく男児のみの活動であった。
- 2) 公益財団法人ボーイスカウト日本連盟『ビーバースカウト隊長ハンドブック』2015年、90-94頁。
- 3) 公益財団法人ボーイスカウト日本連盟『日本連盟規定集 平成28年度版』2016年、70頁。
- 4) 同上、70-71頁。
- 5) 同上、71頁。
- 6) 同上、19頁。
- 7) 同上、77-78頁。
- 8) ボーイスカウト日本連盟『ビーバースカウト隊長ハンドブック』（前出）、65頁。
- 9) なお、当時の保育所保育指針は6領域を「健康」、「社会」、「言語」、「自然」、「音楽」、「造形」としていた。
- 10) 「カブ年齢未満プログラムの実験について」日時不明、2-3頁。
- 11) 財団法人ボーイスカウト日本連盟カブ未満プログラム特別委員会『カブ未満プログラム実験に関する報告書』1984年2月、付表1。
- 12) 「カブ年齢未満プログラムの試行について」日時不明、ページ数なし。
- 13) 「カブ年齢未満プログラム試行隊発隊申請書到着状況表」「カブ年齢未満プログラム特別委員会記録」（1985年6月9日）。
- 14) 「カブ年齢未満プログラム特別委員会記録」（1982年2月11

日）、また「カブ年齢未満プログラムの試行について」（日時不明）。

- 15) 「カブ年齢未満プログラム特別委員会記録」（1982年2月11日）。
- 16) 4、5、6月分を1982年2月の「カブ年齢未満プログラム特別委員会」（1982年2月11日）で示すなど、自転車操業状態で全国の実験隊に提示していたようである。
- 17) 一部、後述する4、5、6月の表記とは異なる部分があるが、それは各月のプログラムを実施した後に加えられた修正であると見なして良いと考える。
- 18) ボーイスカウト日本連盟『ビーバースカウト隊長ハンドブック』（前出）、58-59頁。
- 19) 財団法人ボーイスカウト日本連盟『ビーバープログラム指導者の手引 実験隊用』1981年12月、7、10頁。
- 20) 1995年に、全ての部門で女子の受け入れを開始した。